

**<臨床>第12回国際生化学会議 : 駆け巡り記(海外リポート)**

著者名(日)	小田島 武志
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	1
号	1
ページ	194-196
発行年	1982-12-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00006669/">http://id.nii.ac.jp/1145/00006669/</a>

海外レポート

## 第12回国際生化学会議

— 駆け巡り記 —

東日本学園大学歯学部口腔生化学講座

小田島 武志

第12回国際生化学会議はオーストリア西部の人口約 875,000 の学園都市であるパース市中心部の "Perth Entertainment Center" で、1982 年 8 月 15 日午後 3 時 10 分に開会宣言、記念講演で、8 月 21 日までの 7 日間の学会が開始された。

### 学会参加国(参加人員)

参加国(登録人数)は次に挙げる 53ヶ国の約 2,100 余名で、運営その他も非常にスムーズで盛況であった。アルゼンチン(2名)、オーストラリア(836名)、オーストリア(3名)、ベルギー(15名)、ブラジル(4名)、ブルガリヤ(2名)、カナダ(52名)、チリ(2名)、中国(20名)・台湾(16名)、キューバ(1名)、チェコスロバキヤ(4名)、デンマーク(7名)、東ドイツ(3名)、エジプト(7名)、フィンランド(6名)、フランス(28名)、香港(6名)、ハンガリー(2名)、イ

ンド(28名)、インドネシア(2名)、イラク(3名)、アイルランド(1名)、イスラエル(11名)、イタリア(14名)、日本(256名)、ケニヤ(2名)、クェート(2名)、マレーシア(4名)、メキシコ(15名)、ニュージーランド(17名)、ナイジェリヤ(14名)、ノルウェー(12名)、パキスタン(3名)、ペルー(2名)、フィリピン(1名)、ポーランド(5名)、ポルトガル(1名)、シンガポール(3名)、南ア(9名)、スペイン(3名)、スウェーデン(25名)、スイス(15名)、タイ(6名)、トルコ(1名)、イギリス(96名)、アメリカ(460)、ソ連(後述)、西ドイツ(101名)、ユーゴ(2名)、ザンビヤ(1名)、ジンバブエ(1名)。ソ連はオーストラリア政府からの入国ビザが発給されず参加者はゼロであった(参加予定者41名)。これに対して、中国(中華人民共和国)の比較的多数の参加が特筆される。



写真1. テント張りの示説会場全景

## 専門別テーマ

今回の学会は次の13項目のテーマで行われた。

1. Genome 2. Mechanism of Protein Synthesis and Post-Transcriptional Control
3. Growth and Differentiation 4. Immunology
5. Metabolism and Regulation 6. Hormones
7. Plant Biochemistry 8. Membranes
9. Bioenergetics 10. Mechanism and Regulation of Enzyme Action
11. Structure and Function of Structural and Conjugate Proteins Including Contractile Proteins
12. Neurochemistry 13. Biotechnology

## 学会会場風景点描

一般演題，コロキウム，シンポジウムは，主会場であるパース市の南西郊外数キロ米のUniversity of Western Australia (Fig. 1) のキャンパスで，一般演題は全て示説であったが，この示説会場は巨大なテント張りで，一見サーカス小屋風であった(写真1)。筆者(写真2, 3. 右)は一般演題を8月18日に発表，更に，学会最終日の8月21日のコロキウムで講演した。会場は物理学部の一室であった。物理学部はキャンパスのほぼ中央奥に位置し，古風な建物で，

この建物の1階のベランダにたたずみ，キャンパスを見渡すと，緑の芝生が広がり，ハイビスカスに似た花が咲き，木々の間から Swan River (パース市中央を流れインド洋にそそぐ大河) に漂うヨットがみられ，講演前の緊張を一瞬忘れさせてくれる素晴らしい眺望であった。

## パースへの旅余話

筆者の旅程は成田—台北—香港—シドニー—パースの予定で，1982年8月13日17時発キャセイ航空451便で飛び立ち，香港で同日23時30分発キャセイ航空101便に乗り換え，一路シドニーに向った。ところが，翌日の8月14日朝7時過ぎ目覚め，しばらく窓外を眺めていると，機内放送があり，メルボルン到着が告げられ，まもなく，飛行機は降下体勢に入った。メルボルンはシドニーの南にあり，またメルボルン寄港は筆者のスケジュールにはなかったもので，香港で乗機を間違えたかとビックリ仰天，あわてて乗務員に尋ねると，キャセイ航空101便は曜日によって，シドニー→メルボルンとその逆のメルボルン→シドニーとがあるのだと聞かされ，ホッとした。さらに，メルボルン空港での手荷物検査は，どこの空港でもみられるような，係官がバックを開けて調べるのではなく，前列の



写真2. 慶応大学名誉教授(医学部医化学) 関田 潔先生(左)と筆者(右)。示説会場正面入口にて。

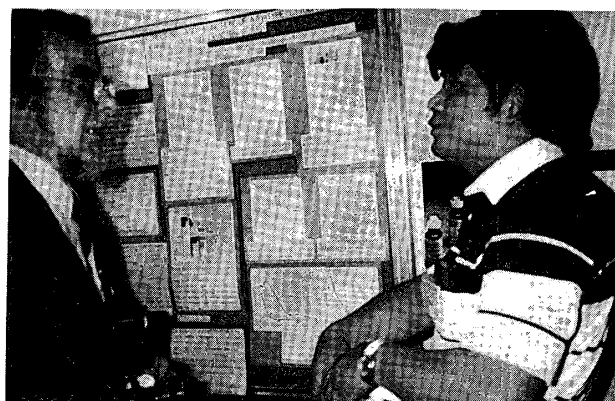


写真3. 示説会場内部風景

東京工業大学理学部教授山中健先生提供。オーストラリア国立大学生化学教授Appleby 博士(左)と山中先生先の示説パネル前でディスカッション中の筆者。

20人ほどの手荷物をカウンターに並べて犬を使って、その臭覚で検査させ、“臭い物”がなければ後の全員はフリーパスという面白い検査方法で2度ビックリ。

復路も往路と同じルートであった。香港までの旅は順調であった。香港空港に8月21日20時55分に到着し、ささやかな土産と着換えを入れたトランクを受け取るために到着ロビーで待っていた。しかしコンベアーが止まる迄待ってもとうとうトランクは出て来なかった。囲りをみると筆者一人になっていた。結論は、筆者のトランクは迷子になったらしい。とりあえず、空港カウンターで迷子のトランクを探してくれるようたのみホテルに着いたのは午前1時過ぎで

あった。香港で着換えもできず、土産物もなく“ションボリ”帰宅。迷子のトランクは数日後宅配されたのだが…。このように、若干のトラブルはあったが、総じて、楽しい旅ではあった。

次回(第13回)国際生化学会議

回りの国際生化学会議は3年後の1985年8月25日から30日迄、水の都オランダのアムステルダムで開催される予定である。

謝 辞

最後に本学会出席の機会を与えて下さった本学の理事会、評議会、教授会の諸先生方に深堪なる謝意を表します。(1982年10月25日記)

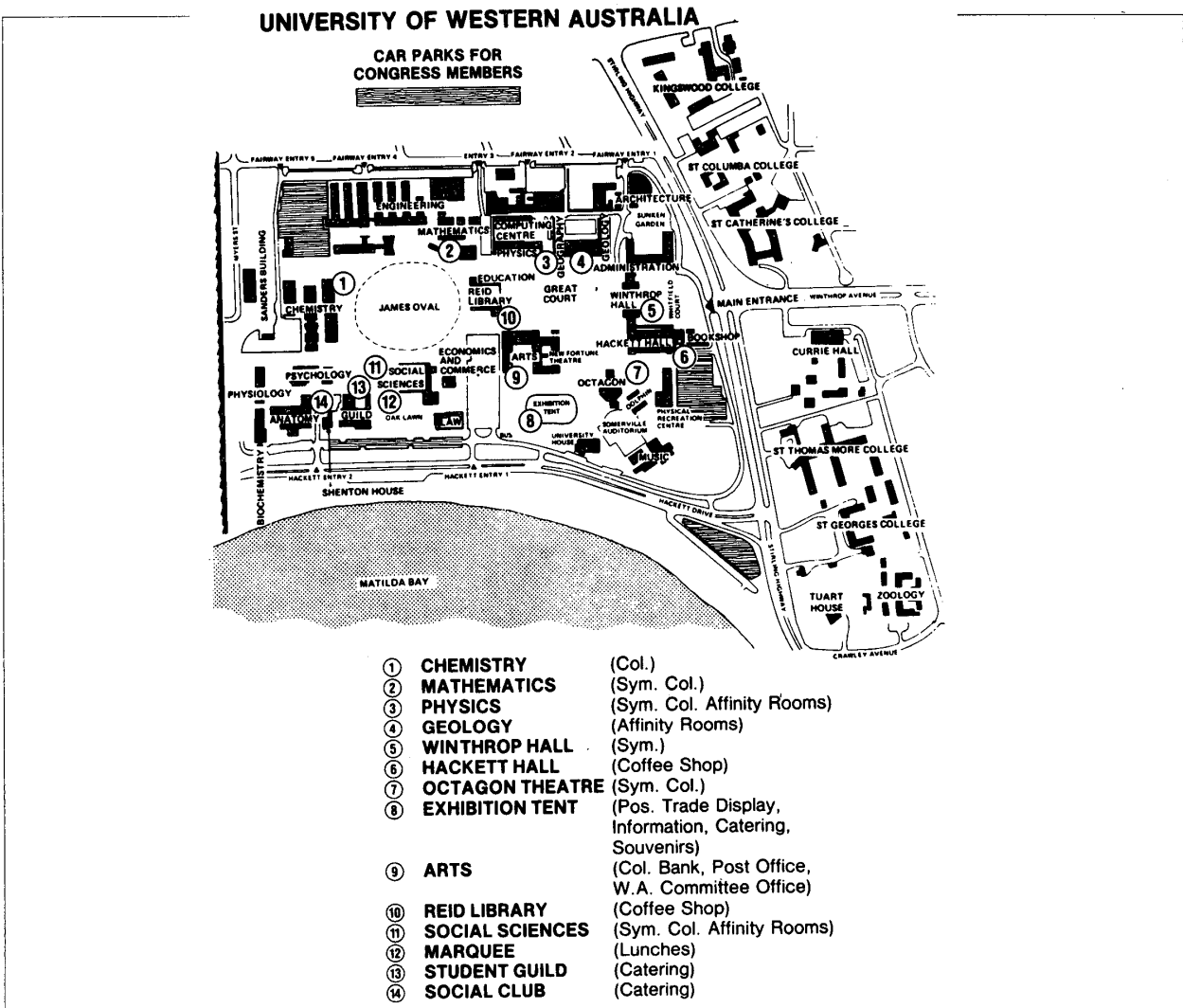


Fig. 1 学会会場となった University of Western Australia の見取図